

医療評価 総合討議

座長： ただ今4人の先生方の発表をうかがいました。私は今日の研究テーマから見れば全く分野外の座長ですが、医療システムを利用する患者という意味では極めて関係が深く、それだけでここに座っている訳です。

4人の方々の発表を聞いて科学の原点はやはり測定であると感じました。

エビデンスベースドという、それでよいと思ってしまいがちですが、エビデンスをどうやって測定するのか、どうやって把握するのか。それを曖昧なままにしてしまうと、極めて危険です。そこをきちんとしないのであればむしろエビデンスベースドなどと言わない方がよい。データベース、データベースと言いますが、データというのはいかに主観が入りやすいものなのかをよく考えておく必要があります。例えば確率は極めて主観的であるという考えがあります。コインを投げて50/50で裏・表が出るなどというのは、主観です。そこに居合わせた皆がそのコインはまっすぐだとか、空気が全く動いていないとか、すべての条件を暗黙に了解しているから50/50とすることに誰も文句を言わない。そのへんをきちんとしておかないと、データベース、エビデンスベースと強調すればするほど危険を伴ってくると思うのです。

私は学部時代、「統計で嘘をつく方法」という翻訳本を読んだことを覚えています。最近PCの性能が飛躍的に向上したため、どんな分野でも統計手法を気軽に使いますが、特に医学の分野では、下手に使いすぎると却って危険がある。私は医学部の先生達に「もっと医学部で統計手法をきちっと教えないと危険だ」ということを、20年前ぐらいから言って来ました。これは私どもの経営学の分野でも同じです。

今日の発表を聞かせていただいて、私が心強く感じたのは、そのへんについて4人の先生方は非常にきちんとしたアプローチをとろうと努力されていることです。ただ願わくば、もう少し医学の分野の人たちが、統計の手法を深く身に付けると同時にその限界というものをきちっと理解していて欲しい。それから、やみくもにデータに基づけばよいと言うのではなく、どのようなデータをどうやって集めるのかをまず初めに確認しておく必要があります。例えば今日の発表の中でも、定性的なものを数量化するという試みがなされていますけれども、何らかの方法で数量化してしまうと後は数字が計算されて出て来る。するとそれで全て完了のように思い勝ちです。ところがそこに行く前に非常に難しい問題が残されています。例えば9段階の評価をすると言っても、それが測定の尺度として適切なのかどうか。また、9段階で評価をしている人たちは、8と9の差を明確に識別出来た上で採点しているのかどうか。いい加減に採点していないか。研究を始める前にまずそのへんのことをしっかりとわきまえないといけない。コンピューターからの結果だけはいつでもきれいな数字で出てきますから、却って危険なのです。そういう意味で、今日の4人の先生方の姿勢にはそれぞれ違いはあるにしても、適切なアプローチつまりきちんとした方法論を採るところに力点が置かれていたことが、私にとって非常に勇気づけられた共通点でした。